

成長の記録

三才から六才へ

昌和たちの世界

NHK制作グループ 瀬地山 滯子



昌和ちゃんたちの生活を四年にわたって記録!!

カメラが参加したことで
親の知らない子どもの内側がわかった。

世界にも例のない貴重な試み — 奈良女子大・蜂屋教授談 —

著者紹介

瀬地山濔子（せちやま・みをこ）



1937（昭和12）年、徳島市に生まれる。1960（昭和35）年、京都大学経済学部を卒業して、NHKに入局する。以後NHK大阪中央放送局で「幼児の世界」「成長の記録」など、主として幼児の発達に関する番組を担当。二児の母親。

現住所 奈良県生駒市新生駒台11-45

成長の記録 三才から六才へ 昌和たちの世界

昭和47年7月5日 第1刷発行

昭和51年2月1日 第6刷発行

著者 瀬地山濔子

発行者 浅沼 博

印刷所 第一文成堂

製本所 田中製本

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号150 振替東京49701

イラストレーション スタジオ・ロータス
木下蓮三・林 大三郎

アート・ディレクター 荒田秀也

© 1972 Mioko Sechiyama

落丁乱丁の場合はおとりかえいたします。

229802



日文 701679393

成長の記録

昭和たちの世界

ニオから来た

NHK制作グループ
瀬地山澤子

日本放送出版協会

114350

目次

はじめに

四人の子どもたちと地域のこと……………

七

航ちゃんのこと——きれいずきやさん 潤ちゃんのこと——アカチャンになりたい 敦ちゃんのこと——ひとりっ子 昌和ちゃんのこと——とんだり、はねたり このあたりのようす

三才児

友だちをよぶ心……………

三

I // アチヨビマチヨ……カネゴン ノ カイジュウ アルヨ——

未知の世界にふみ出す 23

友をよぶ心の動き——「マダ アチヨブネン」 はじめての他流試合 て
んでんバラバラ 「アッチャンがするの！」 「ダチヨウのるのジュンチ
ャンのるの」 潤ちゃんのもり 泣いた潤ちゃんのおにいちやんぶり
「あぶなナイ おかあちゃんあつちいってよ」 子どもの個性と家庭文化
「あちよびまちよカネゴンのカイジュウあるよ」 話したい気持 昌和と
//うさ吉くん// 昌和のやさしい心 潤と千香ちゃん——兄妹の交流
航とお姉ちゃんの衝突 友だちにたち向かう

II // イヤ——ン オカアチャン イテナイト——

あそべない子の再出発 64

「アチヨバナイ！」 「航オニならない 遊べない子の遊びたい気持
「きたないからイヤー」 //男の子らしく?// 「アッチャンの絵メチャ
クチャノ」 「ワタルちゃんの絵メチャクチャー」 「マサカズチャンこわ

「いー」 遊びたいけど遊べない 航と潤の小ぜりあい 二人運転手の電車 航ちゃんの行動メモ みごとな再出発 航ちゃんのチョッカイ 遊べない子が飛び出した

III (まとめ編) // ぼくホが つよいもーん! //

自分を中心にまわる世界 98

潤ちゃんの願いあまえない かまってるほしい おかあさんにすがりつく潤ちゃん 遊べない潤ちゃん 潤ちゃんの願い・おかあさんの願い 潤ちゃんには潤ちゃんの伸び行き 元氣いっぱい // 赤影参上! // 人見知りする敦子ちゃん ハキハキ敦子ちゃん わたし中心の世界 「アンネーコレネーカイジウの本」 「アッチャンは男の子ヨ」 「これ天国やねん」 未知の世界へ好奇心 航ちゃんの質問語録 昌和たちの友だち関係 行動観察開始 グループからはずれている昌和ちゃん 昌和ちゃんの行動軌跡 Bグループに仲間入りした昌和ちゃん ルール遊びをしらない昌和ちゃん もとの四人組へ 「ボクホがつよい」

四才児

自意識の芽生え…………… 一元

I // ウメボシぐみになってン! //

幼稚園・人生はじめての公式場面 141

入園式 ウメボシ組! 幼稚園第一日目 シクシク・モジモジ・イヤーイヤー いすをもつて行きつ戻りつ お返事ハイイ 幼稚園で泣いていた子ら 立ちつくす子ら 子ども自身の心 「オマンジウ、くれはらへんかった」 アサチャンを泣かすおてつだい 「ジュンちゃんのお名前

ウシロになつてゐる！」 昌和ちゃんの自尊心 先生の苦勞

II グニヤリ・グニヤグニヤ——

四才児とは何か？ 174

病氣になりたい 幼稚園イヤ—— おかあちゃんいて。ぼく、できない 不安の克服 頼れるものはせんせの眼 ボクより強い子オンネン 心のささえ—— ひろしくん 「オトコドーシで遊ぶの」 遊びこむこと グニヤリ・グニヤグニヤ ヘそまがり？ ゴンタばかり ゴンタの心 四才児とは—— 自意識の芽生え みられてゐる自分—— 不安と葛藤 だんまりの立ちん坊 途方にくれて泣きじやくる ケロツとしている子は？ モジモジしている子は？ すぐペシャンコになる昌和ちゃん けれども・けれども

III 四才児のいす——

はずかしがる子の心のジャンプ 216

すごい八百長？ 根氣づよい潤ちゃん 掘りつづける並べつづける こゝえてる大西くん 夏的一天 「女っばーいナー」 ケチがついてもやりなおせ 小ぢやな子の無心な行爲 そうだ、ボクは、お兄ちゃんなんだ 「へいのほり教えたるか」 たのしかった夏休み 幼稚園のきまりと子ども心のへだたり 運動会の練習はじまる 練習しない昌和 運動会前日 精いっぱいやりとげる 坐らせられていたいすから遊びこなすいすへ—— 四才児のいす できーた、できた！ 雨はどうして降るの？ 泣きじやくる片桐くん見つめる昌和ちゃん お店やさんごっこ 先生に触れない // うめ組さん // サヨウナラ

I キャブテンのいうこときけ！——

わんぱく団結成 271

もう泣かない年長組 新しい友だち 集団生活はむずかしい わんぱく
団結成 「キャブテンだれ？」 夏のわんぱく団 「サッカーボール、
はじめ！」 開店休業のわんぱく団 人事更迭 「大西！ オマエわる
いでエ」 キャブテン批判 自転車遊び 爽快な木のぼり ビー玉リ
ーダー 秘密基地 秘密基地よサヨウナラ

II 場外で闘つとります！——

ひとり・ひとりの自立 303

体操の苦手な子 へいのぼり 「わんぱくやのにとべないノ？」 「こ
ら、かなわんわ」 ガオーッ・ギョオー オマエが悪いオマエこそ 格
闘のあともあざやかな羊のお面 遠征第一歩 「行かして！ チャンとす
るから」 大遠征 わんぱん団解消

III パン工場遊び——

役割の発見と協力の精神 337

パンについての話合い 紙パンづくり パン工場見学 熱気にあふれた
パン工場遊び パン焼き機ナンバー14 たとえ、HKのいつけだろうと
—— ほかすのイヤヤせつたいに—— おとなからは失われた遊びの世
界 共同絵——パン工場に怪獣なんて許せない はじめての共同絵は真黒
クロゴン ペンキヨウとシュウダイと

はじめに

四人の子どもたちと地域のこと

航ちゃんのこと――

きれいずきやさん

もう小学校二年生になっている七才の航君が、NHKのテレビに放映された三才の時の自分の姿をみて、「ぜったい、あれはウソや……」といった。

以前は、友だちに水をかけられて足がドロコになると、もうどうしてもビニール・プールに入れなかったのである。今はプールで鍛え上げて真黒になっているので、航君にはドロコ遊びも出来なかった昔の自分なんか、どうしても信じられないのであろう。

おかあさんが、「それでも、あんたは、ちよつとでも水がかかったりしたら、もうよう、遊ばなかったのよ、三才のとき、ほんとに」と説明してみても、ご本人は、「ウソや!」といって相手にしない。今の航君に信じられなくても、それは事実であった。そして、それを「ウソや!」といわれるほどに、たくましく成長した航君をみていると「三つ子の魂、百まで」という諺を、そう簡単に信ずるわけにはいかなくなってくる。

昭和四二年三月、私たちは、はじめて航ちゃんにあった。陰山航ちゃんは昭和三九年三月二三日生まれ、そのときは、まだお誕生前であり、当時二才一ヵ月であった。

おとなしそうな子で、小学校一年生のお姉さんといっしょに、庭先でママゴトの茶わんに水を入



砂のついた手拭でジュースのコップを拭いている。

れたりこぼしたりして遊んでいる。

航ちゃんの家は、戦前からの古い家だけれども、とてもきれいに片づけられていて、これが子どもにのいる家かなと思うほど、チリひとつない。おじいちゃんとおばあちゃん、それに高校生の従姉が二階に同居しておられ、人数はとも多いのに、ひっそりとしていて、私たちのようにガラの悪い人間がドヤドヤと入りこんでいいものかしら、と一瞬とまどってしまうような雰囲気であった。

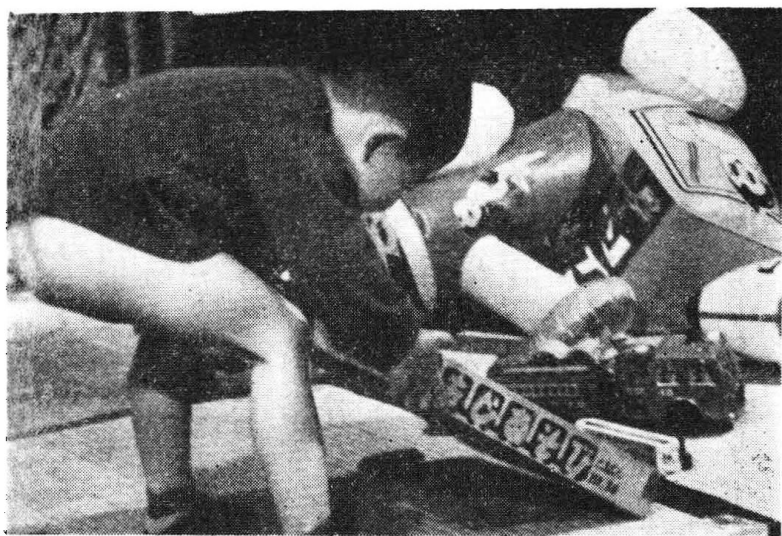
しかし取材のために、ひんばんにおかあさんとおつきあいするようになると、こんな感じは次第にうすらいで、ユーモアのあるおかあさんの人柄のせいか、随分気やすく家の中にあがりこませてもらうようになっていくのだけれど、最初のころはなんとなく足を踏み入れにくい家であった。

さきとはから水いじりをしている航ちゃんによ

うすは、少し奇妙である。水たまりに浮かばせたプラスチックの茶わんを左手の指でチョッと押し、手で動かして、その間、あいている右手の指を、こんな汚いものはさわりたいくないといわんばかりに、硬直させて神経質そうに動かしている。

砂や泥をいじっているときも、けつして手のひらでわしづかみなどせず、棒を使ってかきまぜたり、器で砂をすくったりしている。それでも、遊んでいるうちに、手のひらに砂や水がついてしまふと、あわてて遊びを中断して、縁側にかけてよると、置いてある手拭いで手を拭く。おかあさんがさっき縁側に置いていってくれたジュースのコップを、その手拭いでまたあっちこち拭いてから飲むのである。手のほうは、少しはほんとにきれいになっているけれど、ジュースのコップはたいへんである。砂のついた手拭いで拭くのだから、きれいになったとはお義理にもいえない。けれど航ちゃんは満足そうにジュースを飲んでゐる。おとながいうような清潔とは、意味が違ふけれど、とにかくへきれいずきVやさんらしい。これでは、さぞかし本格的にドロンコ遊びなんかがはじまったら、たいへんなことであろうと——先が思いやられる。

航ちゃんのおとうさんは、お医者さんで福知山線の柏原の病院へお勤めである。遠いから週一、二回家に帰ってこられるだけである。そのため、どうしてもおとうさんが子どもとつきあう時間が少なくなるせい、航ちゃんは絵本をみたり、絵を書いたり、とてもおとなしい静かな遊び方をしている。「もののいい方も、しぐさも女の子みたいでしょ。姉とばかり遊ぶから、困っているんです。どうしたら男の子らしくなるかしら」と、はじめてお会いした時、おかあさんがそうこぼしておられた。



「パンツはきなさい。アカチャンみたい。おかしいわ」

潤ちゃんのこと——
アカチャンになりたい

おじいちゃん、おばあちゃん、いとこが同居、そして姉と二人姉弟で、七

人家族のこの陰山家と垣根ひとつで隔たった隣の家に、同じく三才児の潤ちゃんが住んでいる。

昨年の夏ごろ、板塀のすき間からのぞきっこして遊んだことはあるのだが、両方のおばあちゃんがやかましくいわれるので、行き来して一緒に遊んだことはない。航ちゃんのおとうさんも、潤ちゃんのおとうさんも、ここで育って、ここで結婚されたわけだから、三〇年から四〇年という古い隣どうしなのだが、今、おかあさんたちは普通につきあう程度で特に親しく両家が行き来するという間柄ではない。

航ちゃんの家を出て、西向きの家に来ると、「西浦力王」という表札がでている。私たちが声をかけた途端、おかあさんよりも先に潤ちゃんが玄関にとび出してきた。

潤ちゃんのところには、おばあちゃんとおばさんが同居しておられ、おばさんは独身で、昼間はお勤め、おとうさんは自動車会社のサラリーマンである。そして潤ちゃんには、一才一カ月の妹がいるので全部で六人家族。妹の千香ちゃんは、やっとヨチヨチ歩きをはじめたところで、おかあさんは、病気がちのおばあちゃんと二人の小さい子どものめんどうで、今たいへんな時期である。だから、だいたいいつ伺っても家の中はてんやわんやの状態で、はじめのうち、おかあさんはいいつもそれを気にされているようで、なかなかすぐには家の中へ入れて下さらなかった。昔かたぎのおばあちゃんへの気がねもあってか、きれいにかたづけようとされるのだけれど、私たちはお客さんではないし、かたづいてしまったら△子ども天国▽がなくなりますから、そのままで上がらせて下さいと、毎回お願いしているうちに、いつのころからか、おかあさんもころよく△天国▽へそのまま私たちを通して下さるようになった。

ところで、潤ちゃんは昭和三八年一月二日生まれ、三才三カ月になったところである。

ひとりでパンツをぬいで、今オシッコにかけこもうとしている。トイレに入ると自分で戸をしめてしまつて、おかあさんにみられるのも絶対イヤなのだそうだ。三才前の航ちゃんが、まだおかあさんにかかえてオシッコをさせてもらっているのに比べたら、四カ月先輩だけのことはあるわけだが、ウンチの時などは、さすがにおかあさんも、後始末のことが気にかかつてのぞきにいくけれど、絶対入れてくれないらしい。

トイレから出て来た潤ちゃんは、ぬぎすてたパンツのことなんかすっかり忘れて、オチンチンを出したまま、もう遊びはじめる。「さあ、ちゃんとパンツをはきなさい」とおかあさんからせかさ

れても、この身軽さはこたえられないらしく、潤ちゃんはいっこうにとりあおうとしない。しゃがみこんで、積み木のつづきをやっていたが、向こうの積み木をとうとうとして立ち上がった拍子に、ヒョイとおかあさんに裸のオシリをつかまえられてしまった。「アカチャンみたい。おかしいわ。チャンと立って、ほら」とおかあさんにいわれると、潤ちゃんは「アカチャン」ということが出たのをこれ幸いと、ほんとにアカチャンみたいに寝そべってしまった。足をおかあさんのひざに投げ出して「アカチャンよー」と、寝ながらパンツをはかせてもらうのを待っている。

このころの潤ちゃんにとっては、妹の千香ちゃんがいともおかあさんにしてもらっていることが、ひとつひとつうらやましくて仕方のないことばかりである。「ボクモ アカチャン ニ ナリタイ」——アカチャンになって、おかあさんにだっこしてもらったり、哺乳ビンでミルクをのんで、おかあさんにかまってもらいたい——いつも思っているのであらう。

おかあさんは、仕方なく寝ころんだままの潤ちゃんにパンツをはかせる。おかあさんしてみれば、もう三つをすぎたんだから早くひとりでなんでも出来るようになってほしいという気持が強い。だからこんなことをされると困ってしまうのだが、一方、潤ちゃんの気持がわからないでもない。つきはなしてひとりでやらそうかしら、せがまれるとおりにかまってやってもいいかしら、とおかあさんはしょっちゅうこのことで悩まれる。

隣の部屋に寝ておられるおばあちゃんの咳がきこえた。おかあさんは、急いで台所に立っていかれた。すると、千香ちゃんが、おいてきばりをくったと思ったのか、泣き出しておかあさんの後を追っていく。千香ちゃんが台所でおかあさんに抱き上げられていると、潤ちゃんもすかさず積み木

はじめに



おかあさん相手にお人形さんゴッコの敦子ちゃん。

をほうり出して、なにかいいことのありそうな台所へすつとんでいく。おかあさんは、台所でまた二人にまつわりつかれてしまつて、おばあちゃんのことを気にしながらイライラして、頭が痛くなつてしまうのである。

敦子ちゃんのこと——
ひとりっ子

あくる日、潤ちゃんのおかあさんは、買物の途中でたばこやさんに寄つ

た。そこには、敦子ちゃんがいる。私たちの取材に協力して下さることになっている奥野さんの家である。潤ちゃんのおかあさんは、あいさつがてら、店をのぞかれた。

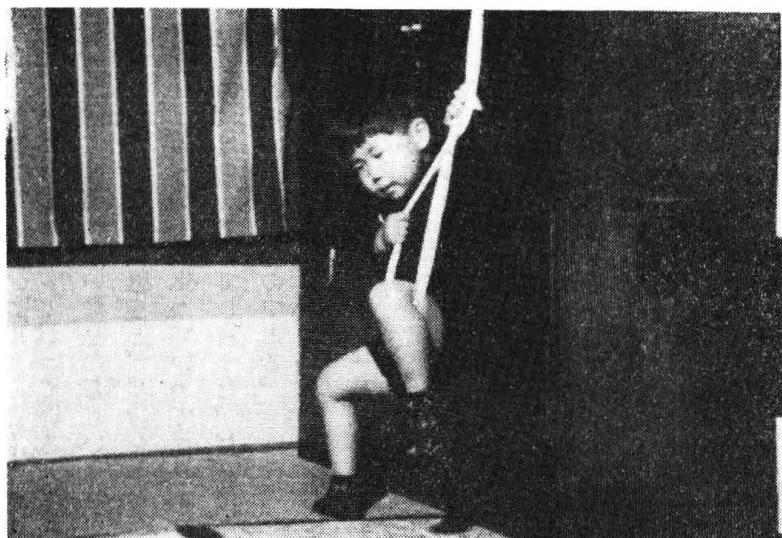
おかあさんが店番をしておられ、敦子ちゃんは、その側で遊んでいた。おかあさんどうしがあいさつを交している間、潤ちゃんはツカツカと敦子ちゃんのところへ寄つていき、敦子ちゃんが持っていたオモチャのピストルを、だまつてとり上げようとした。敦子ちゃんは、びっくりしたような

顔をして、潤ちゃんをよせつけないように手をバタバタさせながら、おかあさんにへばりつきにく。おかあさんに「貸してあげなさいよ」といわれると敦子ちゃんは大きな声で泣きだして、おかあさんをたたいて怒っている。

敦子ちゃんは昨年の夏ごろ、潤ちゃんと毎日のように遊んだことがあるのだが、敦子ちゃんは、いつも泣かされるのでいやになったのか、いつのまにか遊びがとだえてしまっていたという。

敦子ちゃんの家にも、おばあちゃんがおられる。この家は、潤ちゃんたちの家よりもずっと古く、一五〇年はたっているとのこと。この辺の土地のことは、奥野さんのおばあちゃんに聞けばなんでもわかる。奥野さんの家は、商店街に面した角地にあり、この家の一角にもうけられた小さなたばこやさんは、おばあちゃんの発案になり、おばあちゃんの経済的・精神的自立の空間になっている。その後私たちは、しばしばこのお店を出入口にさせてもらったけれど、ほんとうの門は別にある、はじめて、敦子ちゃんに会いに行ったときは、その正門から伺った。古い格式のあるつくりの、広い玄関に立って、おかあさんと話をしていると、敦子ちゃんがチョロツと衝突の陰からのぞくのがみえる。私たちが「いらっしやいよ」と声をかけても絶対出てこようとしない。敦子ちゃんは、ひとりっ子で、航ちゃんと同じ三月生まれ、そのときは、まだ三才になる少し前であった。「父親以外の男の人を見ると逃げていってだめなんです」とおかあさんがいわれた通り、しばらくはスタッフの男性プロデューサーは、敦子ちゃんに泣かれたり、出てきてくれなかったりで苦労した。女性プロデューサー二人も何回か足を運んで、やっとなれ、少し撮らせてもらえるかナーというところをみはからって、カメラマンにそつと登場してもらうのだが、敦子ちゃんは、めざとく新し

はじめに



タンスにひもをかけ、ターザンになった昌和ちゃん。

い「男性」の登板に気がついて、ご機嫌をそこね、どっかへ逃げかくれてしまう。逃げられてしまうと、広い家なので、そうあちこちにライトを仕込んでおくわけにもいかず、私たちはしばしばお手上げの状態になった。こんな時、女性カメラマンがいてくれたら、きつと首尾よく撮れたのにとつくづく思ったものだ。女性カメラマンがいない現状では、ともかくも敦子ちゃんが慣れてくれるまではと、腕の立つ男性カメラマンたちもこればかりはいたし方なく涙ぐましい努力をつづけた。

昌和ちゃんのこと——

とんだり、はねたり

敦子ちゃんのおばあちゃん

んと、昔からとても親し

くつき合っているおばあ

ちゃんが、潤ちゃんのすじ向かいの家におられる。

香山さんという家で、ここにまたひとり三才児が

いる。潤ちゃんと同じ一二月生まれ、三才三カ月の

昌和ちゃんである。

はじめて香山さんの家へ行ったとき、昌和ちゃん